清末藩の文芸（その一　序論）

（付）歌人「毛利碧堂」（十代元恒）について

白木　進

始めに　**清末藩**は防・長毛利家の一支藩、それも承応二年（一六五三）に豊浦支藩から一万石を分知されて、八代二百十八年の歴史をもつ小藩である。藩史を調査するに、資料は非常に乏しいようで、それは中心となるべき藩の公文書類を、維新廃藩の際、藩自らが焼却した為とも伝えられる。然し維新後、清末藩旧記が編せられ、それに重本・堀両氏の父子二代に亘る調査あり、又先覚徳見光三氏が百方探訪した資料を駆使して清末藩史話を著すあり、これらを手掛りに今後の調査を進めて見たい。但し今回は（一回分の量は原稿紙30枚を標準とする限度があるので）本論たる「文芸」は清末藩を含めた防・長全般の概括を述べるに止め、（付）歌人「毛利碧堂」（十代元恒）について　を一往まとめることにする。

一、近世の防・長を支配した毛利藩の体制

防・長二州を領した毛利藩の**禄高**は、公称（幕府と話し合いの上で、公に届け出る表（おもて）高―古高トモ）三六万九千四百十一石三斗一升五合であった。裏（うら）高（再検高トモ）は、

秀吉の文禄3年検地……29万8,480石
家康の慶長15年検地……53万9,286石
貞享3年の調査　……81万8,487石
明治2年藩知事録上……98万8,400石

1、毛利本藩（萩　36万石）

元就　隆元　輝元　1秀就　2綱広　3吉就　4吉広　5吉元
6宗広　7重就　8治親　9斉房　10斉熙　11斉元　12斉広
13敬親　14元徳

2、四支藩（豊浦6万石、徳山4.5万石、清末1万石、岩国6万石）

備考　支藩の禄高は本藩の36万石のうちである。但し清末藩は豊浦藩の分知なので、豊浦藩5万石のうちである。

イ、豊浦藩（長府毛利）

元就　元清　1秀元　2光広　3綱元　4元朝　5元矩　6匡広
7師就　8匡敬（まさよし）　9匡満　10匡芳　11元義　12元運（ゆき）　13元周
14元敏

ロ、徳山藩（徳山毛利）

元就　隆元　輝元　1就隆　2元賢　3元次　4元堯　5広豊
6広寛　7就馴　8広鎮　9元蕃

ハ、清末藩（清末毛利）

元就　元清　秀元　1元知　2元平　3政苗　4匡邦　5政明
6元世　7元承　8元純

ニ、岩国藩（岩国　吉川家）

元就　元春　元長　1広家　2広正　3広嘉　4広紀　5広逵
6経永　7経倫　8経忠　9経賢　10経礼　11経章　12経幹
13経健

3、毛利の一家八門

イ、一門六家

宍戸毛利　厚狭毛利　阿川毛利　右田毛利　吉敷毛利　大野毛利

ロ、一家八門

右の六家に左記二家（永代家老）を加える。

益田家（須佐）　福原家（宇部）

4、毛利家の藩政組織及び階級

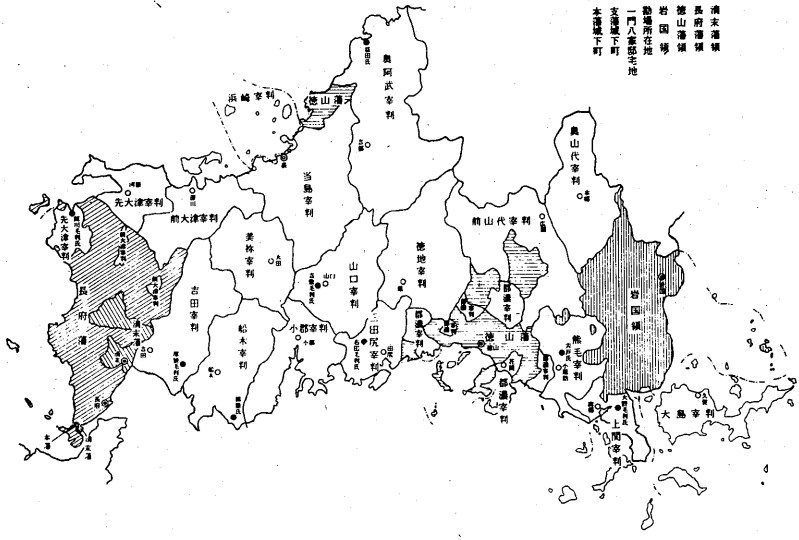
萩本藩は家柄、禄高により格式に差あり、之を一門、永代家老以下、士族・準士族・卒族が凡そ60階級に分かれて、藩政を処理していた。支藩もほゞ同様で、豊浦藩は19階級、岩国藩は18階級、徳山・清末の両藩は17階級だった。

いま清末藩を具体的に示すと、

1家老　2番頭　3馬廻　4中扈従　5御手廻　6並御手廻　7坊主格　8医者　9茶道　10膳夫　11船頭

士族又は準士族

図地別所宰判及び支藩



12矢倉の者　13嗣子の者　14大工　15小細工人
16足軽二組（弓組・鉄砲組）
17中間六組（舁（かつぎ）長柄　小道具　厩（うまや）小人　煮方）　卒族

宰判　郷村支配の中間組織として布いた制度。

藩初は民政や徴税のため、地方を区画して代官を派駐したが、慶安四年頃にはそれが十八区を算した。時代に応じて多少の廃合変改があったが、幕末も十八宰判だった。（注進案22巻研究要覧79頁による。図面も同巻より借用）

二、清末藩の創設と家系

関ケ原の役後、毛利輝元は防・長二州の守として山陰萩に退くが、養子毛利秀元（元就の孫）を豊浦支藩の祖として長府に鎮せしめた。秀元は慶安三年（一六五〇年）没するに当り、遺言して二男元知（豊浦藩二代光広の弟）に清末村外13カ村一万石を分知した。毛利家乗の承応二年（一六五三年）十月二日の条にいう、

是日命アリ封邑ヲ割キテ叔父刑部少輔元知公ニ頒与ス。祖父秀元公ノ遺志ヲ継グナリ。

こゝに元知を始祖とする清末藩が誕生する。藩主は従五位下に叙し讃岐守に任ずるを例とした。その**家系**は、

代	名	（順）	生存期	享年	子女数	うち夭折した数
1	元知（とも）	（2男）	1631—1683	53才	男4　男2	
2	元平	（2男）	1675—1729	55才	男11　男5　女7　女6	
3	政苗（なり）	（7男）	1718—1781	64才	男7　女6	男6　女1
4	匡邦	（7男）	1761—1832	72才	男2　女3	男2　女3
5	政明	（2男）	1789—1818	30才	未婚急逝（家督を継いで三カ月で或いは自殺？）	
	（勢州より養子）					
6	元世	（6男）	1796—1845	50才	男2　女6	男2　女6
	（江州より養子）					
7	元承（つぐ）	（11男）	1833—1849	17才	——	
	（長府藩より養子）					
8	元純	（4男）	1832—1875	44才	男4　女7	男2　女3
	（豊後より養子）					

備考　江戸期は言うまでもなく男系相続制で、男子の後継ぎがなければ家は断絶する。

今、清末藩主の家系を列記するに当り、その歴代藩主は、戸籍上何番目の子か、子女が幾人居て、その中の幾人が夭折（多くは3才未満）したかを附記して見た。大名と雖も江戸期は子女の夭折がいかに多かったか、引いては藩をあげて相続人の男子養育にいかに苦労したかを知る。8代のうち実に4人が他家よりの養子であり、また、成人した藩主8人の年令を平均して見ても48才である。

三、近世防長二州の文運振興と学館の建設

1、近古は**大内氏**が山口を居城として京都文化を取り入れた。中に

も大内義隆は逸早く朱子の新註を求めて、書翰を朝鮮に送り、五経新註并正義の送進を要請したのは天文8年（一五三九）10月のことで、義隆は時に33才だった。

大内氏滅亡後の防長は**毛利**元就が領するが毛利の祖大江氏は元来文学の家である。元房…広元…（12世）元就と続くが、元就は兵馬倥偬の間にも、早く文筆に着目した人で、京都より高倉兵庫頭を招いて学を講ぜしめ、自らにも詠草「春霞集」（118頁参照）がある。

2、近世文芸の中心は漢学に在り、その興隆は　明君の出現―賢臣鴻儒の活躍―学校の設置　というパターンを採るのが普通であった。

イ、本藩　(2)綱広は**万治条目**33条を制す。曰く、

諸士ノ面々常ニ相嗜ムベキコト―諸士ハツネニ文ヲ学ビ、武ヲモテアソビ、忠孝ノ道ニ志シ、仮初モ礼法ヲ乱サズ、義理ヲ専トシテ公儀ヲウヤマヒ、法度ヲ守リソノ役々ニ怠ルベカラズ

(3)吉就の時山田原欽あり、(4)吉広の時山県艮斎あり、(5)吉元に至り、享保3年6月、文武稽古場を創設、次いで12月、城内に**明倫館**を建設、祭酒に小倉尚斎を任じた。

孟子滕文公上―学則三代共之。皆所以明人倫也。人倫明於上、小民親於下。

尚斎に継ぎ山県周南、津田東陽、小田村鄰村、山根華陽、同南冥、繁沢豊城、中村華嶽、山県大華などの名儒輩出す。

因みに学校の設立は、元禄4年、幕府が湯島に昌平校を設くるや、雄藩の之に倣う者多く、佐賀の弘道館、盛岡の明義堂、岡山の閑谷校などに続き、萩の明倫館はその第12位であった。

(13)敬親の学校経営　明倫館は尓後幕末に至るまで藩の中心校として人材育成に当るが、嘉永二年、敬親は明倫館を改築し、また江戸桜田邸に有備館を設けた。

書経説明中惟事事、乃其有備。有備無患。

なお幕末には藩校に準ずるものとして、

三田尻に越氏塾（後に講習堂）河野養哲

山口に講習堂（後に鴻城明倫館）上田鳳陽

があった。

ロ、支藩の学校

1、長府藩　(10)匡芳により寛政四年（一七九二）**敬業館**が設けられる。

主な儒者は、

小田済川（独嘯庵ノ弟）　その子小田南畝　臼杵鹿垣　その子横坡

結城確所

2、徳山藩　(7)就馴が天明五年（一七八五）**鳴鳳館**（後に嘉永五年12月、興譲館と改む）を置く。

国富鳳山　長沼采石　本城紫巖　役藍泉　青木葵園

3、清末藩　(4)匡邦が天明七年（一七八七）**育英館**を建つ。

孟子盡心上　得天下英才而教育之、三楽也。

片山鳳翩　佐々木竜原　国島京三

旧清末藩学事上諸制度（山口文書館蔵―教育沿革史草稿六支藩達書）に曰く、

天明七年（一七八七）藩祖毛利讃岐守匡訓新タニ学校ヲ設立シ学令ヲ作リ毎年開講ノ際学官之ヲ朗読シ大夫有司学生ヲシテ聴聞セ

シメ永ク典礼トナス大意士タル者ハ学問ヲ勉メサルヘカラサルノ要旨ヲ述フ此他文学奨励ノ命令世々之アリト雖モ目今散乱詳カナラス

○士族卒ノ子弟教育方法

藩立学校ノ生徒ハ士族ニ限リ卒已下ハ入ルヲ許サス且士族タリトモ必ス藩立校ニ入学スルノ束縛法ナシト雖モ当初学令中奨論ノ餘響施テ近年ニ及ヒ士タル者ハ必ス入学セシムル習慣トナレリ但遠地土着ノ者ハ勢能ハサル者儘亦之アリ藩費ヲ以テ他国ヘ遊学セシメシ了ハ旧来ノ典形タリ但財政ノ嬴縮ト文運ノ泰否トニ因テ人員ニ多少アリシノミ自費遊学志願ノ者ハ無論何時モ之ヲ許可ス

○平民ノ子弟教育法

卒以下平民ノ教育別ニ制規ナシ其私家塾ニ就テ自由受業スルニ放任ス

○家塾寺子屋役員ノ制度

是亦開閉存廃其自由ニ任セタリ

4、岩国　始祖広家学を崇び、孫(3)広嘉志を継ぎ、由的宇都宮遯庵を挙げ用い、またその子三的も次いで藩教に寄与す。

朝枝毅斎　樋口東里　山県溥泉　三須蛛水

宝歴4年、横山講堂が、文化9年錦見講堂が設けられるが、藩校としては、(12)経幹が弘化3(1846)年　養老館を建つ。

玉乃九華　二宮錦水　樋口遯庵

ハ、諸邑ノ学館

須佐（益田氏）―育英館　吉敷郡問田（益田家）―学習斎

右田（毛利氏）―時観園―後に学文堂　長府（毛利家）―集童場

厚狭（毛利氏）―朝陽館　三丘（宍戸家）―直方場

吉敷（毛利氏）―憲章館　宇部（福原家）―維新館

大野（毛利氏）―弘道館

ニ、私塾の例

萩の楽群堂―仲東門　立野の養義場―難波伝兵衛

萩の時術斎―木村藤太　萩の松下村塾―吉田松陰

岩国　沢写塾―東沢写　三隅　尊聖堂―村田清風

下関　東皐塾―三輪東皐　岩田村　精業舎―国光小源太

下関　竹崎　鷄頭（ゲキノヅ）塾

ホ、寺子屋（清末の部）

学館・私塾が士分の子弟を対象に、漢学中心の教育をしたに対し、寺小屋は一般庶民の子供を相手に、ヨミ（かな・漢字が読める）カキ（かな・漢字が書ける）を教え、必要に応じて算（そろばん）を加え、更には裁縫・技芸を授ける所もあった。

清末藩　7（山口県教育史272ぺに挙ぐるもの）

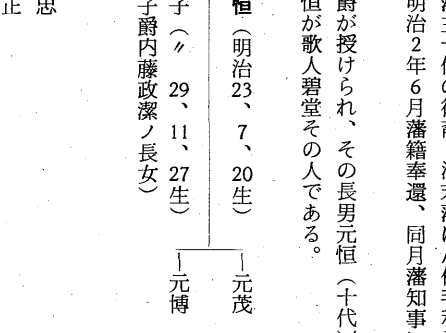
名称	所在地	塾主氏名
上保木村	河田清蔵	
小月村平原	溝口　通	
柳溪精舎小月村	広井良図	
楢崎村	瑞岡宜慶	
久野村	水川除助	
清末村中原	菅　兵介	
同道祖の上	溝口和七	

又云　18（但し明治初年の数　清末藩旧記付冊108ペ）

（付）歌人「毛利碧堂」について

碧堂、本名は元恒、清末藩主十代の後裔。清末藩は八代毛利元純の時、明治維新を迎える。明治2年6月藩籍奉還、同月藩知事に任じ、明治4年辞す。

明治17年、九代元忠に子爵が授けられ、その長男元恒（十代）が大正3年襲爵する。この元恒が歌人碧堂その人である。



毛利元恒の略歴

明治23、7、20　誕生
〃　43、7、30　従五位
大正3、3、23　防長教育会副会長
大正12、5、21　従四位
〃　13、11、17　山口県家禽協会長
〃　14、7、15　小野田セメント取締役
昭和4、6、3　東京へ移住
〃　5、6、2　正四位
〃　11、12、1　勲四等
〃　13、6、15　従三位
〃　15、4、29　旭日小綬章
〃　41、7、28　没す　85才　多摩霊園に葬る。

碧堂の歌業歴

いま多摩市に健在の愛子夫人の手許に、碧堂自筆の履歴書がある。歌歴に関する部を抄録すると、

明治40、3、東京府立四中修了（病のため休学）家庭教師により学習。
大正5、4、金子薫園、与謝野晶子、佐々木信綱、尾上八郎につき歌学を学ぶ。
〃　8、1、歌学研究会を起し、「白梅」〔歌誌〕刊行　二千部。
〃　9、7、「白梅集」〔歌集〕を出す。

作歌数は一万餘。

研究としては「万葉集に表われたる麻里布の里」。遂に刊行するに至らず、残念なり。

昭和4、4、4～5日　広島放送局より、「万葉集に表われたる祝島」を放送す。

〃　8年～14年　東京、大阪の新聞、キング、婦人画報などに発表。

〃　10、4、梅光女学院で、専攻科・四年三年に対し「短歌及び歌学史」と題して講演。

○なお清末藩旧記附冊に、左の記事も見ゆ。

大正十一年毛利元恒（碧堂）作　歌野にて

猟に来し歌野の在は梅咲きつ野にかぎろいの春めきてあり

外3首（略）　（春陽会誌掲載）

右に拠れば、碧堂が旧藩地清末に在って、地元民と睦み、歌人として自らは作歌に精進し、また歌道の指導者として活躍したのは大正期である。

郷土における碧堂の作歌活動

(1)大正初期

後に大田哀歌鳥が水可美（みなかみ）の創刊号（昭和8年2月）に書いた「防長歌壇の回顧」にいう、

……大正二、三年頃かと思ふ。……或は一、二年後であったか、毛利碧堂氏が盛んに新潮の歌壇（金子薫園氏選）に投稿して居られた。又南部友也氏の御名前もよく見かけた。……

関門日日歌壇の起源は何年頃か知らぬが……（担当　吉田楚峰）

……寄稿家には……毛利碧堂……森本一碧……等主なるものであった。……関日歌壇の歌は琢木調が大部分を占めて居た。……現県下の名ある歌人は大部分関日歌壇から送られた。……その後吉田楚峰氏京城日報に転任せらるゝや、毛利碧堂氏が関日の後を引受けられた。

右の関門日日の外、碧堂は地元紙の馬関毎日、防長新聞などの歌壇の選者も担当し、また地元で作歌指導にも手を染める。

(2)大正中期・後期

清末を中心とする下関地区で、女性の歌作指導にのり出し、女性のみの歌誌「白梅」（プリント版？）を刊行したと推定される（白梅二巻6号の大田、弘中両氏の回想文。また水可美二巻6号の小川氏の白梅三年史。）が、現物が見当らず、その時期、期間、範囲など未詳。

歌誌「白梅」発刊の胎動　「白梅」一週年（マヽ）記念号（大正12年7月）62ぺに、「私共の小さな建築」と題する大田哀歌鳥の回顧あり、要にいう、

○大正11年2月、大田が関日紙へ短歌論を出し、碧堂の共鳴を得た。

○11、3、プリント版「白梅」を碧堂が出す。（女子のみ）之らの機運が盛り上り、広く歌人に呼びかけ之を結集し、やがて、県下で初の歌誌「白梅」の誕生を見る。大正11年7月の創刊である。

大田哀歌鳥　諱は義一。明治23、4、1、防府市に生れる。15才頃より短歌に志す。大正11年毛利碧堂の白梅詩社結成に参加し、歌詩「白梅」の編集を担当、作歌に創作に評論に活躍す

清末藩の文芸（その一　序論）（付）歌人「毛利碧堂」（十代元恒）について

る。少くして耳を患う。後の白梅歌集の巻頭に「聾者の歌」19首あり。昭和50年11年、防府天満宮の境内に歌碑建つ。歌は

あふぎ見れば　そらの青きに　うまれたる　天華とも見ゆ　志ろき木蓮

昭和52、4、24、没す、87才。

「白梅」の創刊　主幹は毛利碧堂―清末、編集は大田哀歌鳥―防府。編集所・発行所とも防府におく。印刷は大村印刷所。発行所名は始め白梅短歌研究会。11年12月の第5号より第三種郵便物認可を受け、白梅詩社と改名す。会費―同人は月壱円、会員は五拾銭。誌代は実費四拾銭、誌型は二巻3月号までは菊版正方形変型をとり、以後は普通の菊版となる。量は40～60頁。記念特集号は100頁。

先にも引いた「防長歌壇の回顧」―大田―に、……大正11年6月28日、防府市戎町弘中氏邸で、毛利碧堂氏、松岡星花氏と私、それに弘中晴恵夫人等と「白梅」発行の相談をし、8月1日に第一号を創刊した。云云

碧堂の創刊の辞　五首

吾等こゝにたつとし仰ぐ大空は
　青くし澄みて輝けるかも
あゝ吾等遂にたつべき時は来ぬ
　天にも地にもみなぎる光
離り行く者は追はじな一人の
　まことを求めわれ等たつべき
瞳をあげて吾等ゆくべき空を見よ
　大海を見よ皆光らずや
地を見ればこぼれし種子も芽ぶかくも
　吾等もしかく立つべかりけり

第一巻4号（大正11年11月）には顧問として左の10名を掲ぐ。

生田蝶介　若山牧水　木下利玄　吉植庄亮　竹久夢二　橋田東声
吉井勇　窪田空穂　矢島歓一　石搏千亦

右の顧問は時々作品を載せ、また代る〳〵、競詠歌の選者を務めている。竹久夢二は第3号から表紙絵を画いた。

10名の顧問を配したのは碧堂の力であり、覗いは中央歌壇の空気を取りいれ、連繋を保つにあった。中でも長府出身の**生田蝶介**は、既に東京で「吾妹」を主宰しており、特別に連絡を密にしていたであろうし、また現に東京にも横浜にも「白梅」の同人・誌友は居た。11年11月刊の第5号には、消息欄に碧堂が短歌雑誌12月号（東京日本橋区桧物町九短歌雑誌社刊　第5巻12号）へ「歌壇は歌学の迷信に陥ってゐる」を発表の筈と伝え、自らも努力しているが、中央との連繋がどの程度成功したかは不明。なお第二巻第5号（12年5月）の消息欄では、顧問に尾山篤二郎、横山健堂、宇都野研、佐々木信綱、三木露風、山田耕作を追加しており、露風は詩壇の選者となる。また山田耕作は後に碧堂が郷里清末小学校の校歌を作った時、その校歌の作曲を引き受けている。夢二、耕作とは親しくつき合っていた由で、和歌以外にも特別の縁故があったのであろう。

中央との連絡をはかった例としては、12年4月の「白梅」二巻4号に歌合評があり、碧堂「―本月から他社の歌の合評をする事としよう。」と「心の花」の五首をとりあげている。

地域における碧堂の作歌指導

大正11、9、8、山口町外宮野村公会堂に於て短歌に関する講演。

11年11月号「白梅」消息欄に、毛利主幹、佐波高女（防府）、梅光女学院にて短歌講演をなす。

因みに梅光女学院の広津藤吉院長は「白梅」の客員だった。

12、2、11、白梅詩社・白夜短歌会共催・防長新聞社後援で防長短歌大会が山口町伊勢小路の武学養成所で開かれた。中原中也も出席した。（山口県近代文学年表228ページ）中也は当時山中二年生、14才。中也は前年から既に作歌活動をしており、同人歌集も出しているが、「白梅」誌上にはその作品は見えない。

「**白梅歌集**」の刊行

先にも引いた「私共の小さな建築」―大田哀歌鳥―に、

大正12、6、18、正午から防府町弘中邸で白梅〔歌集〕出刊を協議、集まる者七人、碧堂　大田　松岡　斎藤　波多野　児玉　弘中夫人。とあり。

歌誌創刊一周年を記念して、会員の歌集を編纂、刊行の事は念願であり、「白梅」誌にも予告した。とある。その広告は左の通り。

毛利碧堂選

白梅双書

第壱編

白梅歌集

四六版総布

背金美本

歌数　約七百首

時（ママ）　九篇

作者　六十余名

定価　壱円六拾銭

……内容省略……

愈々九月初旬出版　（「シラムメ」12年9月号）

さて刊行された「白梅歌集」は、奥付に大正12、10、1、白梅詩社発行とあり。四六版で本文156頁　定価　一円六十銭　内容は

和歌　635首　作者58人

詩　9篇　作者4人　である。

碧堂の序に拠れば、和歌は各自が20首を自選したものを提出、うち平均9首を碧堂が選抜した。詩は三木露風の選で、「白梅」に発表した作品より採った。之を白梅双書の第一編とし、爾後二周年三周年と重ねて第二第三の選集を出す意気ごみであったが、それは残念ながら実現しなかった。

○白梅歌集の作品の中から

聾者の歌　大田哀歌鳥

聾者てふまことかなしきうつそみの
　生命の上にも春は尊し

潮風　弘中晴恵

ざわざわと諸葉をならす潮風の
　つのると見れや夕方まけて

鳥影　小川五郎

空高くあがる雲雀のかげみせて
　野面あかるき陽のうごきかも

雑詠抄　毛利碧堂

雨はれていやさやかなる杉の色

谷にかたむき陽はうすれつつ　―秋山路―

人の世の途をゆきて　毛利愛子〔碧堂夫人〕

なくなく　よろこびもなく
愁のみわれにともなふ
わが心病みてはかなく
さだめなき路をぞたどる
こしかたの夢はあれども
あふぎみる力はあらず
（中略）
世はさびし　路は冷たし
われひとりわれを悼みて
ほのぐらき生のいふべ（マヽ）
行きがてに立ちぞわづらふ
みちしばの露になづさひ
星絶えし空を見るかな

この年9月1日、関東大震災あり、会員、誌友にも犠牲者が出る。歌誌「シラムメ」の13年1月新年号には

大なゐ　生田蝶介

大あめつちのふところにわがやすらけく
ありとおもふにこの地ゆればや

以下11首を掲ぐ。

この号に碧堂は〔山口県〕大島遊行15首を載す。

朝霧のはれて海路の瀬戸もせに
まく渦潮はなりどよみつつ

大正12年12月号―第二巻11号の「白梅」誌は、発行所が小月村〔旧清末藩の中心地〕白梅詩社となっている。蓋し編集者大田哀歌鳥が病み、止むなく主幹碧堂自らが編集したのである。

「白梅」誌にみる碧堂の研究、評論の主なもの

かなづかひについて　一、二、三、―白梅　二巻4、5、6号
「ちゝのみ」といふ語について　二巻10月号
新古今研究　大田・南部・毛利の鼎談　三巻4号
金槐集研究　同前　一、二、三巻5、6号
万葉集選講（釈）　一巻4、5号

大正12年歌壇の回想　三巻1号
関西歌壇の回顧　三巻2号
短歌根本論　三巻4号

元就の詞藻について　一、二―二巻1、2号

元就の詠草を集めたものを春霞集と云ってゐる。……彼れの詠草七十余首其他を集めたものであるが、其内でも尤も有名な歌としては

花

けふの日もよしさは暮れぬくれてこそ
枕もからめ花の下蔭

と云ふのと、

青柳の糸くりかへすそのかみは
　　誰が小田巻のはじめなるらん

と云ふのがあるが、此の青柳の歌は尤も世間に伝へられてゐる。この歌は自筆のものが毛利公爵家に残ってゐるが、その自筆にそへて……

此柳詠草ハ勧修寺家〔江戸期を通じて毛利氏と関係の深い公卿家である〕ヨリ後水尾帝ニ奉ル旨御記アリ……

元就の死後、……上聞に達したわけである。

俳句としては

梅さけば月も匂へるかすみかな

雲州に在陣せしころ島根といふ所にて

秋の月　客にやにほの浜千鳥

……（略）……

彼れ〔元就〕の作歌風調は……委細に見るとむしろ金葉集、詞花集、古今集に近いところがある様に思へる、云々

文芸往来に関する事件

白梅の第三巻6号（大正13、6、）に文芸往来創刊の広告が載る。防府町戎町の文芸往来社が発行するもので毎号70ペ　定価二十銭　とあり、歌欄に蝶介、碧堂、哀歌鳥ら、詩欄に小川五郎、創作に哀歌鳥らが顔を並べている。歌誌「白梅」とどんな風に関係していたのか不明であるが、白梅の読者側から異論が出たらしく、13年8月刊の「白梅」第三巻7号の裏の表紙に、「謹告」と題して左の文が載る。

小生等文芸往来に関係いたし居り候処多数の白梅会員諸氏より「二兎を追ふ者は一兎をも得ず白梅に全力をつくされたし」との御忠告を受け諸氏の白梅に御熱心なる事に今更乍ら感激し自今ひたすらに白梅向上に全力いたすべく候新藤君等と相談の結果小生等は文芸往来より退く事に相成候間此段同人及び会員諸君に謹告候也

毛利　碧堂
大田哀歌鳥

「白梅」の廃刊

歌誌「白梅」は表題文字を　白梅（一巻―二巻5号）→「シラムメ」（二巻6号―三巻5号）→「志らむめ」（三巻6号……）と変更しつゝも、40～50頁の内容を保持して続く。二巻12号には友広保一氏が「草路」の筆名で作品発表。この頃小川五郎氏も参加して誌上に活躍するが、氏は三巻9号・10号での大田氏との論争で去る。「白梅」は四巻1、2、3号（31号）を出して終刊するが、小川氏が録した「白梅三年史」（(1)水可美二ノ6　(2)水可美二ノ7　(3)水可美二ノ8　(4)水可美二ノ10）は「白梅」を知る良き紹介書。

その最後の一節を引く。（水可美二ノ10）

以上白梅三年史を叙述した。号を重ねること三十一回、年を閲すること約三年である。其間幾多の変遷動揺はあったがしかしともかく防長歌壇史上に大きな足跡を残したことは争はれぬ事実であ

り当事者たる毛利、大田両氏の功績偉大である。白梅によって誕生し成長した歌人も少からぬのである。云々

碧堂の歌風について

○右の水可美二巻6号の「白梅三年史」における小川五郎の「白梅」創刊号の評に曰く、

本欄の歌は生田蝶介、毛利碧堂の二氏で、碧堂氏の歌は「皇后宮を迎へ奉る歌」と題して二段組一頁17首を発表。

むらさきの夕棚雲のたなびける
　多々良の山になく鳩の声

……（略）……

調子はほゞ薫園張である。同人欄……多くは明星派的作品である。

○防長歌壇の回顧—大田哀歌鳥（水可美1号）に、

……白梅で傑出した歌人の名前だけを掲げておきたい。

先づ毛利碧堂氏、小方白夜氏、竹内八郎氏、小川五郎氏、江原青鳥氏、南部友也氏、女流では弘中晴恵、長井白花、奈良幸子、荘原照子の諸姉、以上の諸氏は県下に於て「白梅」が産んだ歌人中の錚々たるものであらう。云々

○なお大田氏には「白梅」三巻6号（大正13、6、）に「毛利碧堂氏の歌と人」がある。要に曰く、

……私が氏の歌を最初見たのは七八年以前の事であったと思ふ。関日新聞でも沢山見たがそれは今手元にない。金子薫園氏選の新潮の歌壇に次のやうなのがある。

（10首のうち5首をあぐ。いま略す。）

と初期時代を評し、次いで

数年後の林鐘〔歌誌〕時代になると氏の歌は一通り歌として洗練されたものとなって居る。

この時代から氏の歌は万葉調になって来てゐるが、然し万葉の剛健さは氏の歌にはない。万葉調であり乍ら流暢と繊細とが氏の表現相である。

と中期を評し、更に現状及び将来を期して、

氏と文通するやうになってからは益々氏の歌に親しみを持つやうになった。白梅創刊号に発表された巻頭五首〔116頁参照〕は優れた歌である。私はこうした張り切った気魄を氏の歌に要求したい。一体で氏の歌は叙景より叙情に優れたものが多い。……氏の個性が貴族的であり、静観的であり、保守的であると私は云った。……私は氏が環境に侵害されず、地位を意識して貴重な個性をいつまでも隠蔽して居られる人でない事を信じて居るが故に、氏の今後に期待を持つ。……氏の芸術の円熟はこれからである。云々

郷里における碧堂の横顔（プロフィル）

○地元小学校の校歌を作る

清末小の校歌「桜の匂い」は碧堂作詞、山田耕作作曲で、今も歌われている。尤も

いしづえ固くも　育英館の
歴史を受けつぎ　われらのために

この学舎の　なりにしその日
きょうとし祝う　朝日の光
たえなる桜よ　もろ木も芽ぶき
若葉は　のぞみの光にくんず

の語意が子供に理解されるのは難しい。と担当教員は話していた。

在郷中の碧堂は、小学校にも顔を出し、卒業式には賞品を贈るなど世話好きのお殿様だったという。地元民は元恒氏をゴゼンサマ、夫人をオオキサマ（大奥様？）と呼んだ。と古老は語った。

○碧堂は小鳥の愛好家

大正13年には山口県家禽協会長となる。当時、清末の毛利邸は宅地五千坪、裏山五千坪で広々としていた。愛子夫人の思い出話に、小鳥を沢山飼育しました。外国産の白色インコなどはよく売れて、案外に儲かったものです。云々

晩年の碧堂

昭和4、6、3、東京へ移住した。この頃より世情は漸く厳しく、戦時色も次第に濃く騒々しさを加える。

東京では貴族院議員などを仰せつかり、作歌活動などすっかり止ってしまった。

と愛子夫人はいう。昭和41、7、28、小金井市本町三―11―19で没、85才。神道により多摩霊園に葬る。

備考　○碧堂の本籍は今も清末一九八四番地である。

○清末毛利の菩提寺は高林寺で、こゝに一代・三代・七代・八代藩主の墓があるが。維新後廃佛棄釈のことあり、元恒氏は神道により多摩霊園に葬らる。

○愛子夫人はご健在で、多摩市に令息元博氏と住んでいられる。

○資料の歌誌「白梅」、また「白梅歌集」は今日では共に希覯の書である。幸いに前者は全31冊？のうち22冊（田村氏寄贈―県文書館）を、後者の白梅歌集は多摩市の愛子夫人より借覧するを得た。特記して謝意を表する。

清末藩の文芸（その一　序論）　（付）歌人「毛利碧堂」（十代元恒）について